４　各国の研修員の目に映った北海道開発の経験

北海道開発局による研修コースが北海道開発に対する開発途上国の関心を契機として開設されることは、既に述べた。しかし、この段階で開発途上国が寄せる関心は、北海道が戦前戦後を含めたわずか１４０年の開発を通じて一国に相当する社会・経済規模の地域へ発展したという情報に対するものであり、この成果の背後にあった具体的な知見を収集し理解する作業は、派遣された各国の研修員に委ねられる。

したがって、研修で得られた北海道開発の知見が自国の地域開発に活用されるか否かは、来日する研修員たちの目に北海道の開発がどのように映るかによるところが大きい。以下に、北海道開発に対する研修員からのコメントを紹介する。

・ Ms.Sukran Culhaoglu
　トルコ共和国総理府国家計画庁計画専門官
「トルコでは地域開発に関係する行政運営が縦割りで行われており、北海道開発庁のような政策調整を一元的に担当する独立した組織の登場が望まれる。」
（平成１２（２０００）年度地域開発計画管理コース）

・ Ms. Patricia Acosta
　コロンビア共和国ボゴタ市行政管理企画庁マスタープラン部都市開発技師
「コロンビアでは、地方分権の導入により、市町村が広域的な開発計画に拘束されないこととなったため、広域交通基盤の整備が停滞している。市町村の間を調整するシステムの再構築が必要だ。」
（平成１２（２０００）年度地域開発計画管理コース）

・ Mr. Sirai Anak Dah
　マレーシアサラワク州政府企画部長補佐
「サラワク州は、開発の初期段階にあり、北海道開発のような総合的な開発アプローチが必要である。北海道開発について知ったことで、地域の様々な層のコミットを得ながら開発プログラムを進めていくことの必要性を実感した。」
（平成１３（２００１）年度地域開発計画管理コース）

・ Mr. Mkongwa Packshard Paul
　タンザニア連合共和国大統領府地域行政地方自治省上級プロジェクト管理官
「北海道開発が、地域の可能性を評価し、国内で比較優位性を持つ部分を伸ばしていく発想で進められている点が非常に興味深く、自国にとって斬新な発想だ。」
（平成１４（２００２）年度地域開発計画管理コース）

・ Mr. Muhammad Arif Hidayat
　インドネシア共和国海外協力センター技術協力課
「北海道開発で考慮されている中央政府と地方政府の間の調整メカニズムは、行政運営上最も必要な機能である。」
（平成１４（２００２）年度地域開発計画管理コース）

・ Ms. Bexeitova Alua
カザフスタン共和国経済予算計画省指定計画部長
「北海道開発は、カザフスタンにおける地域計画の新たな展開を検討していく上で参考となる。」
（平成14（2002）年度中央アジア地域開発セミナー）

・ Ms. Kaljosevska Orhideja
マケドニア共和国政府欧州関係局二国間・多国間援助課顧問
「マケドニアの国土開発を進めていく上で、北海道開発の手法は大いに参考となり、適用の余地が大きい。」
（平成18（2006）年度地域開発計画管理コース）

・ Ms. Amaratunga Nadika Tushari
スリランカ民主社会主義共和国金融計画省国家計画開発局開発官
「北海道総合開発計画の策定過程における地方自治体との調整は、自国の国家開発計画の策定においても参考とすべきである。」
（平成19（2007）年度地域開発計画管理コース）

・ Mr. Dlani Mvuselelo Dlamini
スワジランド王国地域開発青年問題省地域開発担当エコノミスト
「北海道開発の成功は、中央政府により北海道開発局が設置され、省庁間の調整がうまくとれている点にある。また、それぞれの地域を比較し、各地域の強みを発見することが、特定地域の開発を成功させるために重要である。」
（平成20（2008）年度地域開発計画管理コース）

・ Mr. Khumalo Madoda Abednego
スワジランド王国 Tinkhudla 行政開発省計画課地域計画担当官
「北海道総合開発計画の策定プロセスと内容は、自国における地域開発計画の策定のために参考となる。」
（平成22（2010）年度地域開発計画管理コース）

・ Ms. Chaotsane Mahlompho Veronica
レソト王国財務・開発計画省開発計画課経済計画補佐官
「第7次国家開発計画の2012年における策定を目指す自国において、北海道総合開発計画の策定手法に関するいくつかの部分を取り入れた作業を行いたい。」
（平成22（2010）年度地域開発計画管理コース）

また、本研修で来日し日本に滞在する研修員は、研修のテーマのみならず、我が国の文化を目にし、また人々との交流を通じて、我々日本人にはごく普通のことであっても、大きな関心の眼差しで我々日本人を評価している。彼らが得る印象は、我々が世界を知る、あるいは我々の国づくりを再び考える上でも興味深い。これに関するいくつかのレポートを紹介する。

Mr. Abel Santos Amin
ドミニカ共和国経済計画開発省地域管理開発部地域管理開発政策計画作成課
プロジェクト・マネージャー

私が非常に驚かされたのは、日本人の細部まで行き届いた対処の仕方と人々の礼儀正しさだ。日本人は結果や時間に対してよく歩み寄る。これは私たちの社会で欠けている点である。さらに、挨拶をする際にお辞儀をする謙虚な姿勢。たとえ車に乗って出発するときであっても日本人はお辞儀して見送る。私は、何が日本人をこのようにさせるのだろうと不思議に思い、提供されるさまざまな情報やスタッフの対応からその理由を探ろうとした。そして、広島と神戸へのフィールドトリップでそれが少しわかった気がした。

まず、講義の中で、日本の歴史において江戸時代にサムライが社会階層の頂点にあり、権力を握っていたと知った。サムライは“武士道”を倫理規定として生きることを求められていたはずである。孔子の教えにより、“武士道”は主人に対する忠誠や自己鍛錬、礼儀正しさ、倫理的行動という概念を重視し、これが伝統として世代から世代へ受け継がれてきた。そして道の駅「ふぉれすと君田」の視察において、より現実的な理由を発見した。それは住民参加による意志決定に基づいたもので、これは“プラス思考の心”、“素直な心”、“向上の心”という3つの心によって形作られた“成功の心”というもともと日本人に備わった気質である。

さらに、とても強烈だったのは、日本は20世紀に第二次世界大戦や自然災害などがさまざまな形で国土を襲い苦しんできたことである。すべてを失っても、地域の特徴に注目し、地域社会の基礎を築くというやり方でゼロから始めてきた事実に大いに考えさせられた。日本人がこれらの惨事から再生し、新しくよりよい街をつくり、その経験を他の人々や若い世代に伝えていることは私にとって驚くべきことであった。これらを経験できたことが私の日本滞在の中で最も価値あるものである。

（平成21（2009）年度集団研修：地域開発計画管理コース）

付聯翔
中国　雲南省富寧県発展改革局長

私にとって初めての来日なので、研修中、日本人の仕事ぶりや生活習慣を注意深く観察する中、日本人の謹厳な仕事ぶりと文化の高い生活習慣が印象に残り、深い感銘を受けた。

例を挙げると、研修開始前に JICA 札幌国際センターと北海道開発局が細部まで行き届いた緻密な研修計画を立て、まるまる半日かけて研修カリキュラムについての詳細かつ正確な説明があった。カリキュラム編成は我々の意見を募った上で行われたが、カリキュラム確定後はたやすく変更することはできなかった。研修の中で出される我々の質問に対しては、講師やスタッフが一つ一つ回答してくれた。たとえ即座に

答えられない問いがあったとしても、次の講義で必ず解説してくれた。各講義や視察では、講義時間と休憩時間が厳守され、現地視察ではすでに視察が終わり、我々研修員がすでに車に乗っていても、日本人スタッフは決められた時間まで待ってようやくその場を離れるほどで、一分の繰り上げ、遅刻、早退もなかった。必要となる経費については、事前に研修行程で必要なものについて詳細かつ正確にすべての研修員に周知され、実施過程でその金額が増えることはまずなかった。これ以外に、日本の生活で注意深く観察し気がついた点は以下のとおりである。

仕事や生活を問わず、人と顔を合わせるときはいつも互いに心のこもった挨拶をし、謙虚で礼儀正しい姿勢をとる。

赤信号のない交差点で出会う車輌は常に停止し、互いに譲り合い、通行人がいるときは通行人を先に行かせる。

都会でも田舎でも至る所で秩序整然としていて清潔で、どんなに辺鄙な場所であっても投げ捨ててあるゴミを見つけるのは難しい。

これらを成し遂げるために必ず備えなければならない私が真剣に考えた3つの条件は、一つには、自然環境のいたる所及び社会活動の各部にすみずみまで行き届いた緻密な政府の社会公共管理。二つ目は、しっかりした国民の素質教育と社会の道徳環境。三つ目は、国民一人一人がその行いを習慣として積極的に身につけることである。

（平成21年（2009）度国別：中国西部地域行政官研修）